

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：34506

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00519

研究課題名（和文）草月会資料調査に基づく戦後前衛芸術の研究 - 安部公房・勅使河原宏を軸に

研究課題名（英文）A Study of Postwar Avant-garde Art Based on a Survey of Sogetsu-kai Materials:  
Focusing on Kobo Abe and Hiroshi Teshigahara

研究代表者

友田 義行 (Tomoda, Yoshiyuki)

甲南大学・文学部・准教授

研究者番号：40516803

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：戦後日本のアヴァンギャルド芸術運動において、文学・映画・戯曲等のジャンルを横断した実践がどのように結実したか、その実態と意義の一部を新たに解明することができた。草月会資料室などでの調査に基づき、『いけばな』、『爆走』、『1日240時間』、『フィルム・モザイク』、『けものたちは故郷をめざす』といった作品に関する論考を発表したほか、『爆走』についてはフィルムのデジタル復元を行った。編著『フィルムメーカーズ22勅使河原宏』や、エジンバラ大学出版から刊行予定の論文集などで、映画監督としての勅使河原宏の仕事を、その背景とともに詳細に論じた。また、地域の映画館とも共同企画を立て、研究成果の発信に努めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後日本のアヴァンギャルド芸術運動において、ジャンルを横断した実践がどのように結実したか、その実態と意義の一部を新たに解明したことは、主に日本文学史、日本映画史、日本美術史、文学と映画の比較研究といった学術領域に新たな知見と一定のインパクトをもたらした。特に、一般財団法人草月会所蔵のフィルムをデジタル化し、映画館や国際映画祭での特別上映を実現できたことは、学術的貢献にとどまらず、一般の映画ファンにも日本映画の魅力を訴える社会的意義があった。『フィルムメーカーズ22勅使河原宏』や、エジンバラ大学出版から刊行予定の論文集も、日本の前衛芸術運動に関する知見を国内外に広く波及させるだろう。

研究成果の概要（英文）：This study shed new light on some of the realities and significance of how the postwar avant-garde art movement in Japan came to fruition in practices across genres such as literature, film, and drama. Based on research conducted at the Sogetsu-kai archives, I have published essays on such works as Ikebana, Explosion Course, 240 Hours in One Day, Film Mosaic, and Beasts Head for Home, as well as a digital reconstruction of the film of Explosion Course. In my edited book Filmmakers 22: Hiroshi Teshigahara and a collection of articles to be published by Edinburgh University Press, I discuss in detail Hiroshi Teshigahara's work as a film director, along with the background thereof. In addition, I have also collaborated with local cinemas on joint projects to disseminate research results.

研究分野：日本近現代文学

キーワード：安部公房 勅使河原宏 アダプテーション 日本近現代文学 映画 前衛芸術 アヴァンギャルド

## 1. 研究開始当初の背景

日本における戦後前衛芸術運動への学術的関心は、美術や音楽、舞踏や写真、映画や文学といった様々な領域で高まりを見せていた。しかし、日本の前衛芸術運動の拠点であった草月アートセンターを擁した草月（現：一般財団法人草月会）の所蔵資料を活用した研究は、十分に展開されてきたとは言いがたい。一次資料の精査という基礎的な環境を整備しなければ、前衛芸術運動の総合的研究や、それを支える個別の作品分析も困難なままである。

前衛芸術運動の震源地と呼ばれた草月アートセンターの活動については、当事者たちによる証言や評論を集めた資料集等が刊行されてきた。また、同センターに関わった文学者や美術家たちに関する研究も一定数蓄積されている。一方で、草月会資料室には断続的に関係者・遺族から新たな一次資料が搬入されているにも拘わらず、その多くが研究のために充分活用されることなく保管されているという状況であった。

日本の前衛芸術運動の全体像を把握し、歴史的背景を踏まえた作品分析を行うためにも、草月会所蔵資料の精査が求められている。私は運動の中軸を担った勅使河原宏と安部公房の協働に着目し、関連資料の発掘と評価に取り組み、その成果を『戦後前衛映画と文学 - 安部公房×勅使河原宏』（人文書院、2012年）等にまとめてきた。しかし、この本で取り上げられなかったフィルムやテープに加え、台本や宣材といったノンフィルム資料を含む膨大な資料が、草月会資料室には所蔵されており、そこへ新たな資料が加わりつつあった。

以上が研究開始当初の背景である。こうした状況を草月会関係者の協力を得ながら打開し、日本における戦後前衛芸術運動の研究を展開させたかったというのが、研究に取りかかった動機である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、戦後日本の前衛芸術運動において、文学・映画・戯曲等のジャンルを横断した実践がどのように結実したか、その実態と意義を解明することにあつた。具体的な研究活動として、まず文学者・安部公房と、映画監督・勅使河原宏が創作の中軸を担った言語／映像テキストを分析対象とし、草月会資料室での調査に基づく考察を行う。その上で、二人の周辺に範囲を拡大・遡及していくこととした。彼らの作品の多くは、言語・映像・音声・絵画・写真等、様々な表現・媒体の複合体であるため、各要素の特徴や同時代の影響関係をも浮き彫りにした上で、テキスト論やアダプテーション、メディアロジー研究の知見を活用して作品分析を行い、新たなテキスト解釈を提出することを目指した。

また、現在では視聴・閲覧すること自体が困難となっている作品に関しては、映像・音声のデジタル化や、文字・画像の復刻を行い、文化／研究資源として復活させ、それらの内容分析を行う。主に1960～70年代にかけての文学史・映画史・美術史の空白を補填するとともに、作品や活動の意義を明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

草月会資料室に所蔵された資料を最大限に活用し、当時の社会的・歴史的背景や、分析対象とする作品の間テキスト性を明らかにした上で、文学・映画・戯曲等の作品を分析する方法を採った。また、前衛芸術と呼ばれる作品の多くは、言語・映像・音声・絵画・写真等、様々な表現・媒体の複合体であるため、テキスト論やアダプテーション、メディアロジー研究の知見を活用して考察を行った。

現在では視聴・閲覧すること自体が困難な作品に関しては、映像・音声のデジタル化や、文字・画像の復刻を行った上で、作品分析や史的位置づけを行う方法を採った。また、フィルム素材自体に関する研究を行うため、フィルム所蔵者である一般財団法人草月会から許諾を得て、専門のフィルム業者に技術提供を依頼した。具体的には、映画フィルム『爆走』をデジタル復元したほか、『おとし穴』『他人の顔』『燃えつきた地図』『白い朝』『1日240時間』のフィルムチェックを行った。これらはいずれも勅使河原宏監督作であり、一般財団法人草月会がフィルム所蔵者・権利元であるため、許諾を得た上で、株式会社IMAGICA Lab. に技術提供を依頼した。

なお、草月会では資料調査のほか、関係者への取材も行った。また、資料調査先として、草月会以外にも国立映画アーカイブ、国立国会図書館、京都文化博物館、横浜放送ライブラリー、神戸映画資料館、東映太秦映画村映画図書室、おもちゃ映画ミュージアムのほか、各公立図書館、各大学図書館を利用した。

#### 4. 研究成果

戦後日本の前衛芸術運動において、文学・映画・戯曲等のジャンルを横断した実践がどのように結実したか、その実態と意義の一部を新たに解明することができた。草月会資料室などでの資料調査および関係者への取材に基づき、『フィルム・モザイク』、『いけばな』、『爆走』、『1日240時間』、『けものたちは故郷をめざす』、『赤い繭』といった作品と、各作品の制作に関わった安部公房、勅使河原宏、勅使河原蒼風、安岡章太郎、大野松雄ら芸術家に関する論考を発表した。いずれもアダプテーションや協働の観点を重視し、各メディアの特質に留意したメディアロジーの知見と、ジャンルの枠を超えた間テクスト性を読み取って分析した。これらの論考は、主に日本文学史、映画史、日本美術史、文学と映画の比較研究といった学術領域に新たな知見と一定のインパクトをもたらしたはずである。

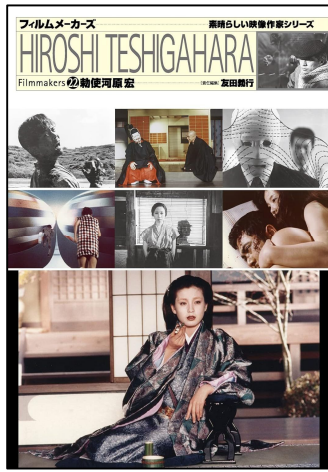
また、ドキュメンタリー映画『爆走』については、一般財団法人草月会の許諾を得てデジタル化を実現した。『爆走』と、以前に科研費の助成を得てデジタル化した『1日240時間』は、大学での学術イベントのほか、地域の映画館や、国際映画祭でも上映し、あわせて解説や講演も行った。こうした企画は、学術的貢献にとどまらず、一般の映画ファンにも日本映画の魅力を訴える社会的意義があったはずである。

研究成果は口頭発表のほか、学会誌や学術書に論文等の形で発表した。特に、編著『フィルムメーカーズ22 勅使河原宏』と、エジンバラ大学出版から刊行予定の論文集 *ReFocus* には、四年間で行った研究成果の多くを盛り込んでおり、勅使河原宏監督を中心とした戦後日本の前衛芸術に関する研究を国内外に広く発信するものである。

研究開始当初には予期していなかった展開として、研究期間の前半に COVID-19 の世界的感染流行が起きたため、資料調査のための出張が制限された。一方で、感染症をテーマに特集を組んだ学会誌に、アジア太平洋戦争敗戦に伴う引揚げ体験と感染症に注目した安部公房論を執筆することができた。また、2021年に展開された勅使河原宏没後20年企画で、『砂の女』など世界的に知られたモノクロ映画作品に、一部カラーフィルムが用いられている可能性があるといった発言がある研究者から為された。『他人の顔』でも同様の可能性があるとしてから考えていたため、草月会から許諾を得て株式会社 IMAGICA Lab. に依頼し、両作品に加えて『おとし穴』『白い朝』『1日240時間』のマスター・フィルムを調査した。その結果、メーカーの異なるフィルムが混用されている事実は発覚したが、カラーフィルムは用いられていないことが明らかになった。実はカラーフィルムが用いられていたといった新たな発見にはならなかったが、誤った言説や自らの仮説を明確に否定することができた点は収穫だった。

なお、研究開始当初は、『サマー・ソルジャー』『銀輪』『利休』『動く彫刻』『時の崖』といった映画に関する調査に多くのエフォートを割く予定であったが、『サマー・ソルジャー』については資料調査こそ進んだものの未だ作品論の構想には到らなかったため、今後の課題としたい。他にも単独の作品論にこそ結実しなかったものの、『銀輪』『動く彫刻』は『1日240時間』など他の勅使河原監督作との比較、『利休』は編著の中で西田博至氏による執筆を通して研究成果を発信することができた。『時の崖』についても継続して研究に取り組んでいる。

研究期間中には勅使河原宏没後20年を迎え、出版や講演に関わる形で研究成果を公表することができた。2024年には安部公房生誕100年、2027年には勅使河原宏生誕100年および草月流創流100周年を迎える。学界だけでなく、地域・社会からも安部公房と勅使河原宏を中心とした戦後前衛芸術運動への関心や、再評価の動きが高まることが予想される。こうした機会も活かしながら、より広く研究成果を発信していく予定である。



『フィルムメーカーズ②勅使河原宏』  
(編著書、宮帯出版社、2022年)



『第19回大阪アジアン映画祭公式カタログ』  
(分担執筆、2024年)

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 友田義行	4. 巻 87
2. 論文標題 安部公房×映画	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『季刊文科』	6. 最初と最後の頁 52-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 友田義行	4. 巻 84
2. 論文標題 安部公房の引揚げ体験と 感染	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『昭和文学研究』	6. 最初と最後の頁 80-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 友田義行	4. 巻 2024
2. 論文標題 特別上映《大阪万博と勅使河原宏》－『1日240時間』の復元および作品背景などについて	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『第19回大阪アジア映画祭 公式カタログ』	6. 最初と最後の頁 68-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 友田義行
2. 発表標題 大阪万博と勅使河原宏
3. 学会等名 第19回大阪アジア映画祭（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 友田義行
2. 発表標題 『1日240時間』上映と解説
3. 学会等名 甲南映画祭2023
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 友田義行
2. 発表標題 勅使河原宏と安部公房の大阪万博
3. 学会等名 おもちゃ映画ミュージアム 勅使河原宏生誕95年記念上映と講演PART2
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 友田義行
2. 発表標題 『いけばな』上映と研究発表「前衛映画を「いける」こと」
3. 学会等名 善光寺平前衛派エキシビション2022
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 友田義行
2. 発表標題 『1日240時間』一よみがえるEXPO'70の展示映像ー
3. 学会等名 2022年度MOBIO産学連携オフィス テーマ別合同シリーズ発表会vol.1「万博」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 友田義行
2. 発表標題 安部公房の引揚げ体験と作品 感染症・生物兵器・隔離
3. 学会等名 川端康成文学館2022年度連続講座
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 友田義行
2. 発表標題 『インディレース 爆走』上映と解説
3. 学会等名 善光寺平前衛派エキシビジョン2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 友田義行
2. 発表標題 勅使河原宏の 原点 としての初期短編
3. 学会等名 おもちゃ映画ミュージアム勅使河原宏生誕95年記念上映と講演PART1 (招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 友田義行
2. 発表標題 帝国日本の崩壊と安部公房 開拓民と労働者そして感染症の移動
3. 学会等名 第36回占領開拓期文化研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 友田義行
2. 発表標題 文学国語の前衛教材 - 安部公房「赤い繭」の論理
3. 学会等名 善光寺平前衛派エキシビジョン2020
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 友田義行（責任編集）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 宮帯出版社	5. 総ページ数 214
3. 書名 フィルムメーカーズ22 勅使河原宏	

1. 著者名 Co-edited by Marcos Centeno-Martin and Lorenzo J. Torres Hortelano	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Edinburgh University Press (EUP)	5. 総ページ数 -
3. 書名 ReFocus: The Films of Teshigahara Hiroshi. The avant-garde scene in Post-War Japan.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap (リサーチマップ) <a href="https://researchmap.jp/tomoda-yoshiyuki">https://researchmap.jp/tomoda-yoshiyuki</a> 甲南大学 教員・研究者紹介 <a href="https://researchers.adm.konan-u.ac.jp/html/100000994_ja.html">https://researchers.adm.konan-u.ac.jp/html/100000994_ja.html</a>
--



6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------